

段坂と唱る處にありけり、こゝらの町家を後に築地へうつされて、元飯田町築地飯田町とわかれてき、九段坂の上は寛永のころ、飯田口と唱たり、この飯田口のはとりなる町家なれば、やがて飯田町といふなり、慶長年間、飯田某開發せしと、土俗の口碑に傳ふ、是不はまらず、

〔江戸砂子〕番町東西北七十八町四谷市谷牛込の三御門の間、御外廓の内を云、此内御旗本衆のやしき也、一番町より六番町にいたり、うら表新道土手何番町など、ありて、むづかしきやしき町也、一書曰、御旗本御番方の武士を御城西の方に置く、町割を賽の目を用ひられ、番町とせらる、ものは慶長の御下知たり、二四六の偶目は陰なるゆへに裏町を用ひられ、奇目は陽なるゆへ、その町一町づ、也と云、又曰、今の愛宕山後天徳寺の西城山といふ所より、西北の方上高田下高田といふ地まで、牛込忠左衛門殿先祖知行三千石の場なりと、

〔南向茶話〕問曰、番町の名目壹より六迄有之候事、由來も有之候哉、

答曰、此地に數代居住せし古老の物語に、御入國の始、麾下の士に此地を下され候刻、六組に分て勤仕致し、故に壹より六迄の名目ありて、前後入込候由、五番町と申所は、只今少計残り候は、柵町の内へ入申候由なり、又彼老人の物語に、六番町の方へ市ヶ谷御門より上る坂を、三年坂と呼び候事、寛永十三年、外廓出來の刻、新に開ける坂故に云爾と云々、是に付て思ふに、牛込神樂坂より北へ築土へ出る、小坂をも、三年坂と號するも同意なるべし、京都東山清水觀音門前より横へ北へ下る坂をも、三年坂と號するは、清水は大同二年に草創、同三年に此坂を開ける故に云爾と、舊記に載之と同日の談なるべし、又麴町貝坂は、元は芝青松寺の舊地にて、此寺青松甲斐と云人の草創由、此所當時玉虫氏の屋敷に其跡あり、故に甲斐坂と云よし、

〔江戸砂子〕櫻田 山下御門幸橋の内より、虎御門の外までの總名也、風土記殘卷號櫻田者、以其郷之岡及野櫻樹多也とあれば、むかしは櫻木の多くありし所なり、荏原郡のうちとあり、今は豊